

公文 公による「公文式」創造からグローバル 「KUMON」への教育におけるブレークスルー

—読書の再発見とちょうどの追求—

沖 田 克 夫*

ここに紹介するのは、国際的にも注目を集めている公文式教育が、ブレークスルーを2回、および継続的にイノベーションを繰り返してきた事実である。1回目のブレークスルーは、わが子の家庭教育から公文式教育システムを生み、2回目はシステムのグローバル展開を導いた。資料は、1954年から1995年までにおける創始者である公文公の言説全体を中心とし、4つの異なる分野（総合的品質管理、近世教育史、認知心理学、経営学）からの客観的研究成果をもちいた。公文式の戦略的イノベーションは、読書の再発見によって点火され、そのエンジンはちょうどの追求であった。

目 次

1	はじめに	24
1. 1	研究の目的	24
2	方法	25
2. 1	資料と方法	25
3	結果	26
3. 1	公文式の概要	26
3. 2	公文式の発明から教育システム完成まで	30
3. 3	Made in Japan の教育システム	36
3. 4	公文式のグローバル性	46
4	考察	51
5	まとめ	52
	引用文献一覧	53
	巻末参考資料	55

* 本学経営学研究科博士前期課程

1 はじめに

1. 1 研究の目的

本稿は、国際的にも注目を集めている公文式教育の本質を、関係資料をできるだけ駆使して、客観的に解析しようとした研究である。

公文 公¹⁾ (くもん とおる 1914 - 1995) は、わが子の幸せを願い、基本は健康第一、そして最大関門が大学入試であると思い定めた。偶然、自身が高校数学教師である見地からわが子の家庭教育の点検と、小学校から高校までの算数・数学教育の内容検討を迫られた。けっきょく、わが子が小学生の間の家庭教育として微分・積分を終わらせることにした。そのための自習教材を自ら構想し、足し算から高校数学終了までの計算だけを抜き出し、他を削ぎ落として、計画的に実践した。実際の実践指針は「無理しない」「教えない」であった。公文公の特異な家庭教育は、わが子にあらかじめ養っていた高い読書力に支えられて成功したという。この成功を一粒の種として50年後の現在、「公文式 / KUMON」が、国内だけでなくグローバルに Made in Japan の教育システムとして展開している。

そこで、公文公による家庭教育とは何か。また、一人から420万人に、そして大阪から世界展開に至る公文式教育の発展過程でどのようなブレイクスルーがあったのかを検討し、その要が読書の再発見であったことを明らかにしその意味を考察する。

この間に取り組むために4項目を点検した。まず公文式の現況と定義を見た。次に、その起りから完成までの経過とその後の発展を概観した。そして、公文式教育の効果と効果を生み出すシステムと特性を明らかにした。さらに、公文式教育システムのグローバル性の有無を点検した。

識者の間では、家庭教育を基盤にして教育の問題が議論されていない。「知られざる公文式」と言われるだけでなく、家庭教育は見落とされているのだろうか。家庭教育は、非公式であっても無意味な教育ではない。本稿は、科学的視点から、あるいは被教育者である子どもの視点から、子育てと家庭教育・学校教育・社会教育の全体をできるだけきちんと見て、21世紀前半の教育を論じる試みである。

1) 公文式の創始者。本文3.2.1 (p.8) の紹介参照。

2 方 法

2. 1 資料と方法

公文式の創始者で、公文教育研究会の会長として公文式を牽引した公文公の言説を、公文式に関する公開資料と当時の業務用資料によって、また公文教育研究会の現役社員へのインタビューによって調査した。なお、筆者は1975年から30年間、公文教育研究会で研究開発業務に従事した。しかし、本稿は、著者が「10代の子どもたちの読書」に着目して図書館に関する研究を志した後に、改めて現／元担当者を訪ねて提供いただいた資料によっている。あわせて、外部の研究者らによる公文式に関する著作を集めて、4つの異なる分野（総合的品質管理、近世教育史、認知心理学、および、経営学）からの客観的研究成果を分析した。

2. 1. 1 公文公資料

公文公の著書は29冊。そのうち17冊はくもん出版と公文数学研究センターなど社内組織による。その中に、自伝『やってみよう—子供の知的可能性を追求して』がある。外部出版社では、講談社5冊、ごま書房と学習研究社2冊、ほかは廣済堂出版、婦人生活社、PHP研究所によって出版されている。そのほか、重要な資料として、公文式初期のパンフレット2点、および対談や寄稿を掲載した書籍が4冊。また、公文式指導者向けの指導情報雑誌『やまびこ』の巻頭言と連載記事「会長を囲む座談会」がある。その他、定例の「会長講座」などでおこなった講演記録がある。以上が公文公による言説の一次情報である。その中で本稿では、講演記録は未完であるため参考にとどめたが、そのほかすべてを検討対象とした。（巻末参考資料：公文公著書一覧参照）

2. 1. 2 外部資料

1958年から2009年の間に公開された、公文教育研究会以外の著者による公文式に関する資料は全部で23点であった。本稿では、その中から単なる紹介以上の踏み込んだ記述がある8点の資料を検討した。内訳は、雑誌掲載論文が1点、また、公文式を中心主題とした書籍は3点であった。さらに、欧米で公開された英文資料は3点で、その内2点は邦訳がない。（巻末参考資料：公文式関係資料一覧参照）

2. 1. 3 公文式に関する文献の状況

国立国会図書館の書籍検索では「公文公」編・著で19件がヒットした（ノイズを除いた件数、以下同じ）。国立国会図書館でタイトルが「公文式 or KUMON or くもん式」の書籍検索では

で8件がヒットし、雑誌記事検索では7件が表示された。また、CiNiiでは「公文式」で15件であった。

比較のために、検索語が「進研ゼミ」(株式会社ベネッセ・コーポレーション)では、書籍検索で31点、雑誌記事検索で7件がヒットした。また、検索語が「才能教育研究会 or スズキ・メソッド」では、書籍検索で8点、雑誌記事検索で41件のヒットであった。公文、進研ゼミとも雑誌記事の点数が一桁で、業容が大きいにもかかわらず内部からの広報も、外部のジャーナリズムによる報道と評価・批判もともに少ないと筆者は考えた。

2.1.4 方法

まず、「公文公年表」を作り出来事を記入する方法で整理した。公文式の原型の発明から発展の段階を順次たどり、そこに仕掛けられたイノベーションまたはブレークスルー²⁾を検討した。つぎに、外部の著者による分析と付き合わせた。もとよりそれぞれの次元と視点が異なっていたが、それらの多様性を公文公の思想を引き出す梃子とした。構造化にはKJ法A型を用いた。

3 結 果

3.1 公文式の概要

3.1.1 公文式の現況

以下は、公文教育研究会2010年3月の会社概要である。(出典 公文教育研究会 [2010])

社名	株式会社 公文教育研究会
代表取締役社長	角田 秋生
所在地	<大阪> 大阪市北区梅田 <東京> 千代田区五番町
創立	1958年7月(昭和33年)
設立	1962年8月(昭和37年)
資本金	44億1,800万円
連結売上高	711億3,500万円
連結経常利益	65億5,000万円
従業員	3,478人(KUMONグループ全体)

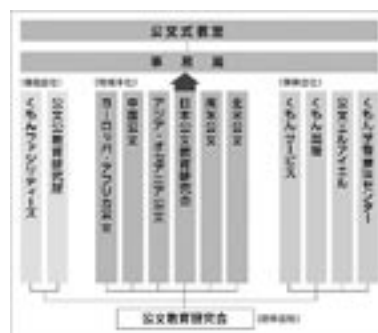


図 3-1 組織図

2) 戦略転換。Andy Grove [1997] は「10Xの変化」に斬新的改善では生き残れないという。考え方は1964年にJoseph M. Juranによって提示されている(司馬 [2003])。ブレークスルー・マネジメントを拓いたのが司馬正次である。

KUMONグループの事業概要

- ・算数・数学，英語，国語，フランス語，ドイツ語，日本語，書写などのプログラム教材の研究開発，制作，指導法の研究，ならびに教室の設置・運営管理
- ・物流事業および公文式教材の製版・印刷事業
- ・児童書，絵本などの出版および教具，知育玩具など教育関連商品の開発ならびに販売

<国内> 教室数：1万7,000教室 学習者数：144万人

指導者数：1万4,700人

<海外> 教室数：8,100教室 学習者数：288万人

<普及地域> 世界46の国と地域（日本含む）

国・地域/ 事務所所在地

大韓民国/ ソウル. **台湾**（提携会社）/ 台北. **SINGAPORE**/ シンガポール. **MALAYSIA**/ クアラルンプール, ジョホールバル. **THAILAND**/ バンコク, バンナ, コンケン, チェンマイ. **PHILIPPINES**/ マニラ, ゼブ. **INDONESIA**/ ジャカルタ, スラバヤ, バンドン, スマチュラン, バリ. **AUSTRALIA**/ シドニー, メルボルン, ブリスベン, パース. **VIETNAM**/ ホーチミン. **香港**/ 香港. **中華人民共和国**/ 上海, 広東. **INDIA**/ ニューデリー. **U.S.A.**/ ボストン, ニューヨーク, ニュージャージー, ワシントンD.C., ホノルル, ロサンゼルス, サンフェルナンドバレー, フェニックス, サンフランシスコ, シアトル, シカゴ, デトロイト, セントルイス, アトランタ, ダラス, フロリダ, ヒューストン. **CANADA**/ モントリオール, トロント, バンクーバー. **MEXICO**/ メキシコシティ. **BRASIL**/ サンパウロ, リオデジャネイロ, ペロオリゾンテ, クパチーノ, ボルトアレグレ, ブラジリア, ロンドリーナ, リベイロンプレット, サルバドール, プレゾデンチブルーデンチ, カンボグランジ, カンピーナス, フォルタレーザ, ベレン. **CHILIE**/ サンチアゴ. **ARGENTINA**/ ブエノスアイレス. **COLOMBIA**/ ボゴタ. **U.K.**/ ロンドン, マンチェスター, ブリストル, グラスゴー, バーミンガム, リーズ. **IRELAND**/ ダブリン. **GREECE**/ アテネ. **GERMANY**/ デュッセルドルフ, フランクフルト. **SPAIN**/ マドリード, バルセロナ, バレンシア. **Republic of SOUTH AFRICA**/ ヨハネスブルグ, ケープタウン, ダーバン. **QATAR**/ カタール. **U.A.E.**/ アブダビ.

3.1.2 生徒数の推移

国内学習者数（図 3-2の黒線）は，創立以来15年間地を這っていたように見える。しかし，1万人まで11年間，100万人まで24年間であった。これを片対数グラフによって成長率で見ると，1964-67年に中だるみが認められるものの1983年まではほぼ直線を示し順調な成長軌道に乗っていた。1992年に157万人を数えた。その後微減に転じて2010年現在144万人。これは，国内では学齢人口の12%を越える。

1975年から始まった海外展開をあわせた合計学習者数（図3-2の灰色線）は2010年現在423万人で、海外学習者数は国内の2倍となった。

比較のために国内最大手塾である進研ゼミの生徒数を細線で示した。進研ゼミは、公文式より10年遅い1958年に始まって、80年台の終わりに公文式を追い抜き、2008年は272万人であった。

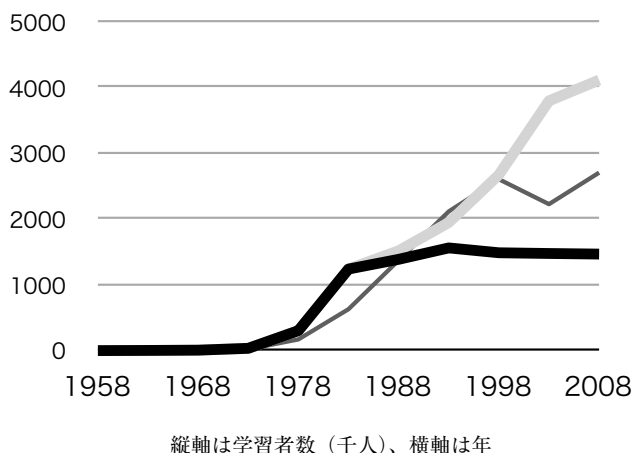


図 3-2 学習者数の推移（進研ゼミ数値は週刊東洋経済 [2009]）

3.1.3 公文式教育とは何か

公文式教育とは本来、「小学生に微積分まで」解けるようにし、「読書好きに」しようとするシステムである。

公文式は家庭に在る。学校教育ではない。まして学校から外に持ち出した教科をなぞる学習塾ではない。学習塾は成績の上積みをねらって放課後時間をどこまで奪えるかのゼロサム・ゲームを展開する。しかし公文式は、大学受験勉強の総時間の最小化をねらった。つまり、公文式教育は、綿密に再構成された家庭教育のサブシステムである。

公文式は、小学生のうちに、またはできるだけ早くに、数年後高校でうける授業がよく解るために必須な条件である計算力だけを習熟させてしまおうとする仕掛けであった。それによって、生徒は実際に授業を聞いた際に授業時間中に深い理解ができるから、予習復習や大学受験のための勉強時間を省くことができる。そのために、小学校から高校までの算数・数学を構成している多くの分野・領域の中から一筋だけを抜き出した。一筋とは、足し算から微積分に至る一連の代数計算であって、図形をはじめいわゆる数学的思考など計算以外の一切を含まない。だから、生徒が授業を聞く必然を損なうことはないばかりか、むしろ活発に思考しながら聞く構えになって、学校でシナジー効果を生んだ。公文公は、「学校と相俟って子どもの学力に培う」³⁾ といった。

公文式を「21世紀の寺子屋」（木下 [2006] p.33など）と評する人が少なくない。一言で定義することは難しいが、あえて学習者と指導者の2つの視点で要約すると、

3) 1993年ごろ、公文公と著者らが懇談して、1時間ほど後に鉛筆で書いたこのメモをわざわざ持参してくれた。

- 公文式の学習は、独自の教材に、一人で取り組んで、いつも100点を取りながら、数学は計算力だけ、外国語は英文解釈力だけ、国語の読解力・読書力の自立だけに限定して、高等学校水準をゴールとして進んでいく自習学習法であった。
- 公文式の指導は個人別で、学力診断に始まり、学習の調子が悪くなる前に復習させながら進ませた。復習が必要か否かの判断は、その教材を100点に仕上げるために要した時間を計測し、脳のネットワークの固定が、最終ゴールを支えるに足るまで進んでいるかを評価しておこなった。実際は、その趣旨で教材1枚ごとに割り出された標準完成時間表を基準にした。

現行の教材は、算数数学が幼児（7A）から高校（P）まで23段階4,520枚、国語が幼児（8A）から高校（O）まで22段階6,200枚で構成されていた。一直線型教材である。学習の出発点は生徒それぞれの学力診断の結果によってばらつく⁴⁾が、本来のゴールは最終教材一つだけである。公文公が意図したゴールとは、小学生で微積分が解けようになり、読書好きになるなどであった。それは子どもが本来持っている可能性の追求であった。しかしながら、実際はそれぞれの目的と事情で最終教材修了まで続ける生徒は少なかった。

目の前の現実論的立場で最終教材を目標としなければ、公文式が持つ徹底した個人別の自学自習型学習の特長が際立つ。つまり、学校の進度に追いつくため、または予習のための公文式利用であった。実際、子どもの学力の個人差を、安心できるところまで解消するために使われた場合が最も多い。さらにまた、この特長を必要とした様々な社会的・制度的場面も多数見出すことができる。

たとえば、学習に影響する何らかの障害を持つ子どもたちは、専門機関の診断を受けていると確認できた学習者だけで常時7,000名を越えている⁵⁾。個々の障害に応じて必要なだけの繰り返しができる仕組みで、しかも着実に進歩するからであった。

また、少年院での導入実施があった。入院させられた少年らは、学校文化を嫌って非行文化になじんだけれど更正に学力は不可欠であって、たいてい一桁の足し算（A教材）段階程度からの学習開始となるけれども、11ヶ月間の在院期間中に寸暇を惜しんで取り組み、退院時に因数分解や微積分（J－L教材）まで進んでいる例は珍しくはなかった。

4) 中学1年生が6月から公文式算数・数学を学習し始めた際の出発点のパラツキは、G教材（学年相当）から6%, F教材(小6)から10%, 以下同様にE 41%, D 23%, C12%, B 6%, A以下2%であった。(公文[1977] p.17)

5) 障害名別では、広汎性発達障害：4割、知的発達遅滞：2割、ダウン症：1割、以下ADHD、LD、聾・難聴、身体障害、てんかん、脳性マヒ、高次脳機能障害、色弱・全盲、その他の順。これらに取り組む2300余りの指導者に対して、教室における障害児指導をサポートする専門部署が東京と大阪に設けられている。

それだけでなく、成人筋ジストロフィー者のための病院導入をはじめとする疾病や傷害に対する例、海外赴任子弟・留学生の例など多様な個人別学習の需要があった。そこでは見捨てられた可能性が部分的ではあっても回復された。

今後、リメディアル教育や職業準備教育でも貢献する可能性があるだろう。学習社会は、誰でも、いつでも、どこでも、必用な時に必用なだけ、自由に学ぶことができる社会である。

これらの公文式の経験が示すように、学制以来140年にわたって牢固にできあがった教育の学校主義という見地では教育全体の実態が見えないのである。公文式もまた学校主義のメガネで論じるならば限界がある。では、公文式の実態に正面から取り組んだ研究とジャーナリズムにはどのようなものがあるだろう。ジャーナリズムでは、欧米に明るいジャーナリスト木下[2006]と、その英語版Kinoshita[2008]があり、研究では、MITで活躍したShiba[1986]が教育のイノベーションを進めたという視点から、また知識経営の生みの親であるNonaka[2008]は「場」を通じて暗黙知を共有した実例としてそれぞれ報告している。後ほどやや詳しく見ることにしよう。

3. 2 公文式の発明から教育システム完成まで

3.2.1 自習教材で小学生に微積分まで：ブレイクスルー I

はじめに公文式の原型が誕生した背景を簡単に見ておこう。公文 公は1914年、高知市に生まれ、私立土佐中学校、高知高校、大阪帝国大学数学科を卒業した。高知県立海南中学教諭をはじめに、海軍教授、土佐中学・高校などを経て大阪市立東高校を退職した1968年まで33年間高校数学教諭をつとめた。その間、1958年に現在の公文教育研究会の前身を創立している。大正デモクラシーの空気を吸って育ち、土佐中学（三根円次郎校長）⁶⁾で「個人別・能力別・自学自習の教育」を経験している。公文公の成人期が「日本の学生文化における教養主義は昭和10年代に完成した」（筒井[1995] p.105）と重なる。博覧強記で膨大な蔵書があったという⁷⁾。

妻公文禎子（くもん ていこ 1921 - ）は奈良女子高等師範附属小学校から女子師範を卒業。木下竹次から「伸びていく教育」と呼ぶ独自の自律教育（いわゆる合科教育）を受けている。その影響を、「子どもたちが育った我が家の雰囲気もまたそういうものでした」（公文禎子[1998] p.228）とのべた。また公文夫婦はそれぞれに大正デモクラシーが生んだ個性豊かな教育をうけ、

6) 『土佐中学校要覧』[1930] の設立趣意書には「進んで上級校に向かい他日国家の翹望する人士の排出を期するものなり」とある。つづいて、「本校の特に留意する点」として「一、個人指導に重きを置き授業能率の増進を図ること一、天賦の能力を発揮し自発的修養に努めしむること」など5点が示されている。

7) 「先生が土佐高校におられた短い期間、私は先生のお宅にうかがって、膨大な蔵書の中から合計二百冊近い本をお借りしては読み耽るという生活を続けていた。最初は先生の方から『こんな本を読んでみてはどうか』とヒントを与えて下さったのだと思う」と経済学者・竹内靖雄は『公文公会長喜寿記念文集』に記している。

それを常に教育を考える際のモデルとしていた。

公文式の原型の誕生は偶然だった。長男公文毅（くもん たけし 1946 - 1997, 1972年入社, 1978年から社長）が1954年, 「小学2年生の5月のとき, 算数のテストが意外にふるわないときがあり」, そのテスト結果で, たかが繰り上がり一つを教えきれない戦後教育の孕む意味を見抜いた, 母禎子が公文公を動かしたことによって公文式の原型が始まった。「中学までは国語の力をつけておけば大丈夫と考えて読書に力を入れて育てた」のだから意に反してやむをえずであった（公文公 [1959] p.8）。しかし, 5月以来, 小学校, 中学校の教科書と学習指導要領などを検討して, 翌2月にあらたに方針を次のようにたて家で計算練習を開始し, 6年生の7月に目標とした微積分を終了した。5箇条の方針は次のとおり。

- ① 毎日半時間の勉強時間。
- ② 小学校成績向上を目標とせず大学の入試問題が解けるようにする。小学校の教科書を参照しない。
- ③ 途中で止めるといやになるのでいつまでも続ける。
- ④ 一日分の問題を作成して子どもに夕食前に自習させる。私は夜採点する。間違った箇所の説明は夜せずに, 必要な注意を書いて渡す。
- ⑤ 教材進度を次のようにする。（以下省略 公文公 [1959] p.8）

この方針を点検しよう。①は, 子どものバランスある生活が続けるためと, 誕生時からの方針「健康第一」と幼児期からの方針であった「国語力さえあれば」の再確認である。②は, 家庭教育の旗色を鮮明にしている。高校教諭だからできた学校の相対化であった。③は, 目標達成への構えである。以前にお茶を濁した轍を踏まないため。「無理しない」ちょうどのペースを確保するため。④は具体的な方法。自習教材づくりにすべてを込める。これを, 実際に, 父子は1,000日余り続けた。

高校数学の授業で, わずかし学べない生徒は板書を写すだけで精一杯だが, 最もうまく学ぶ生徒は, 授業中にその数学を理解していたと言われる。公文公の観察によれば, 両者の差は, その数学を理解するための前提となっている計算力の有無であった。だから, 単純で機械的な計算力を必要な段階まで, できるだけ早く身につけてやりたいと考えた。そのために, 家庭教育の内容を, 目の前の学校の課題に合わせる「当たり前」を保留して, その子の自律を見込んだ長期的理性的目標が「大学入試」であるのだから, それに直線的につながる計画を立てて実践を徹底した。つまり, これまでの当たり前の家庭学習は受動的であったのだが, 公文公は当初から微積分をゴールに設定したまっすぐな道と比較している。後者の場合は, 小学生の間に達成可能と見積もることができた。目論見は成功した。特異な家庭教育の発明であった。

不動の目標を直視したそれは、能狂言の宗家に代表される伝統文化などで見られる代議りのための修行カリキュラムと重なる。一般においてもそれぞれの家庭教育本来の目標を取りもどすことを可能にしたこの方法は、当たり前の受動的家庭教育をブレイクスルーするものとなった。

3.2.2 公文式算数・数学へ：イノベーション I

一子相伝は珍しくない。しかし、公文公にはたった一人のための成功にすぎないのではないという確信とブレイクスルーの予感があったのだろう。1956年、新しい教育法として改良と汎用性の検証に進んだ。まず、

息子の同級生や近所の上級生らがうちの子と同じように進歩するかどうか、(中略)自分の子どもが楽に学力がついてくるので、知人に子どものことで相談を受けた時に、子どもの教材を渡したところ、ほとんどの人から、子どもは楽に勉強し、学力がつき、算数だけでなく他の学科の学習の態度まで良くなり、意志が強くなり、明朗性を増すなど精神生活上にも役立っているとか、子どもの高校進学への不安がなくなったなどと言われるようになりました」(公文公 [1965] p.10)

と思った通りに力が上がったことを確認した。

つぎに、1958年、初めて指導者を委嘱して開いた3つの教室で、「子どもたちが面白そうに勉強に来る」様子を「ますます自信を深め」た(公文公 [1991] p.204)。そして、教室を徐々に増やした。

さらに、1962年、

福祉法人博愛社(児童養護施設)に学生アルバイトを雇って、無料奉仕で指導に当たった。(中略 1964年からは)大阪市民政局所属の養護施設でも同じように始めました。(中略 養護施設での活躍を通して)「子供は可能性を持っている。その可能性を探り当て、無理をせず、伸びるだけ伸ばしてやるのが、われわれの務めなのだ」ということをはっきり認識したものです。(公文公 [1991] p.224)

また、模索した軌道にのせるための最初の教材の考え方を定式化することもできた。

この学習をする生徒には最初は本人の学力より少々低い程度、すなわち一枚を十五分程度で終り、訂正に要する時間を加えても一時間に三枚くらいは楽にできる程度の問題を与

えます。もちろん、全然教えなくても生徒が自分でやれる内容のところでは、採点をして間違っただけの問題を指摘しますが間違っただけの箇所は、自分で見つけさせます。(公文 [1965] p.12)

ここまでで公文式教育システムの実用性が検証された。その後、学習者が増え、1970年代は毎年学習者数が倍増した。

3.2.3 読書力のための推薦図書と国語教材を開発：イノベーション II

3.2.3.1 読書の再発見

公文教育研究会の本部には毎月、全ての生徒の学習を記録した報告書が集まる。そのデータは集計されて教材改訂など指導施策の数値的裏付けとなっている。この報告システムは、機能と資源の投入についてみても、企業会計の規模に匹敵する電算機システムであった。

報告書集計の中から公文公は、「幼児で方程式を学習しているような（特別に高い進度の）生徒を見てみますと、例外なく読書が大好きです」（公文公 [1982]）という事実を発見したという。さらに報告に注目し続け、聞き取りを重ねて「数学をできるようにするためには読書能力を高めるべきだ、ということが明らかになってきたのです」（公文公 [1993b]）と、4年がかり、のべ300万人の観測から結論づけた。

この結論は、以前、招集されて海軍教授であった頃からの素朴な信念であった「できないものは仕方がないのだ、という一般的な気持ちを持っていました」（公文公 [1991] p.35）をひっくり返す発見であった。「仕方がない」ではなかった。高いレベルの学習を支える「読書」の再発見であった。

教育基本法は、能力に応じた教育を国民に約束した。それに加えて、公文公が取り組んだ教育は、能力の上限まで伸ばしてよしとするだけでなく、能力そのものを大きくする希有な教育であった。

読書の再発見は、その頃すでに明らかになっていた幼児期からの発達促進とあわせて、公文式教育の可能性を大きく広げた転換点となった⁸⁾。

3.2.3.2 独自の「すいせん図書」に力点

公文公はすぐに動いた。「すいせん図書」を作り、その後に始めた公文式国語教室には「く

8) 学習能力の可塑性への挑戦は、「転換する社会にあって、その意味が問われている一斉主義（恒吉 [1995] p.201）」をゆさぶりブレークスルーする可能性があった。しかし、「幼児方程式一万人」のかけ声とともに、早期教育の結果を性急に求めた営業戦略が、保坂（[1994] 204p）、辻本（[1999] p.203-210）らの批判を浴びて挫折した。そのため第3のブレークスルーは遠退いた。

もん文庫」を必ず設けさせ、生徒と地域の子どもたちに利用させた。くもん文庫の数は、国内に17,000。

現在の「くもんのすいせん図書一覧表」全650冊（巻末参考資料参照）は、ウェブサイトダウンロードできる。表面は、赤ちゃんレベル（5 A）から小学2年生相当レベル（B）まで。子どもたちに人気が高い本を各レベル50点選んだ。上位5点はとくに子どもたちによろこばれる本で、これを必読としていた。網掛け部分は、国語教材に採用されている作品。裏面は小学3年生相当レベル（C）から、中学3年相当のレベル（I）まで。I-1は『TN君の日記』、I-2は『高瀬舟』、I-3が『こころ』、そして。最終 I-50の『戦争と平和』（全4巻）までである。

この一覧表は、30年間に延べ500万人の子どもたちの文庫にかかわる行動の報告を集めることによって選び抜かれた本を、子どもたちの読書力にふさわしく13のレベルに区切り、読みやすい順に配列してあった。改訂は毎年行われた。だから、これを使えば、どの子にも「外れ」の本を避け、「当たり」の本を見つけることが容易になる。ちょうどの本は子どもを本好きにしてくれるといわれる。

公文公は「「すいせん図書」は、ともかく活字をいやがらないということを第一目標にして、まず何よりも読むのが好きになるようにということで選んだ」（公文公 [1989] p.179）といい、「どの子も読書好きにさせるにはちょうどのもを与えることが大切。読書が嫌いな中1の生徒に『はらぺこあおむし』を音読させて、ほめるようなことも大切」（公文公 [1988] p.19）。そのようにして子どもを「本好きにさせて、「くもんのすいせん図書」で読書の偏向をなくする」（公文公 [1993a] p.212）ことも目標になるという。さらに続けて、「すいせん図書の2Aレベルを10冊ぐらい面白く読むようなら、次にAレベルの本を与えるようにし、Aレベルの本を10冊ぐらい読めるようになったらBレベルの本を与えるようにすれば国語学習が楽になります」（公文公 [1985b] p.150）と指導者に勧めた。

「くもんのすいせん図書」は、従来のブックリストにはない「子どものちょうど」を取り込む仕組みを備えてそれを運用したイノベーションであった。

3.2.3.3 「読書力」を目標とした国語教室を開始

公文公は、「くもんのすいせん図書」を作った翌1981年、「公文式国語教室」を開始した。

「自学自習」の基礎となるものが読解力、すなわち本を読んで内容を理解できる力です。まず読書によって読解力を身につけてやり、さらに高度な内容を読めるようにするために、教材学習をさせているのだと考えていただきたいのです。そして幅広い読書を通して、子どもたちは人間性を養い、人生観を確立し、やがて社会に貢献できる人材として成長していくのです。（公文公 [1990] p.185）

そのため

公文式の国語教育において読書と教材学習は絶対に切り離すことのできないものです。読解力を身につけて子どもにとって必要で十分な読書を可能にするためにこそ教材学習があるのです。(公文公 [1989] p.179)

といい、実際に、全ての教材が各レベル200枚の構成でそろえていたにもかかわらず、後に国語教材だけ400枚構成に改めた。追加部分は「読み物」であった。創業者だから基本枠を動かす変革ができたのであろう。

さらにその上、前述の「すいせん図書」運動を強調した。「くもんのすいせん図書」一覧表は、公文式国語教室の開始に先立つ1980年に342冊が選定され、1990年からは全650冊。乳幼児(5A)から中学3年相当(I)までの各グレード50冊が教材と平行して薦められている。そのうち、子どもたちに人気が高い上位5冊は必読とされる。

3.2.3.4 数学のノウハウを道具学習に転用する：イノベーション III

この時期の公文教育研究会の動きを見よう。学習者数が100万人を越えた1980年代初頭に、公文公と毅はそれまでの数学1科目から、一方は足し算以前の幼児を加え、他方は読書・国語と英語を加えたりテラシー3科目体制へ移行した。それらは、公文式算数・数学のノウ・ハウを新規の科目と対象に転用しようと挑んで成功させたイノベーションであった。

この時期に読書を掲げたのは、前述した読書の再発見があり、その背景にある読書への思い入れは公文公の読書体験からきている。そこには、大正という時代性と円本、新潮社『世界文学全集』、そして「岩波文庫」創刊と続く教養主義の熱気があった。公文公は「以前から国語教育の必要性を痛感しておりました。最初はすべて「すいせん図書」運動でやってみようと考えていたのです」(公文公 [1987] p.13) という。つまり、国語教育の必要性は痛感しても市場性はないと考えていた。だから当初、国語教材の開発は販売用教材を想定していた。しかし、読書力を目的にしてムダを削ぎ落とした国語教室システムを立ち上げた。

高等教育を前提とするならば中等教育での英語教育は必須である。算数数学と同様に英文解釈力だけに絞り込んだ教室システムを立ち上げた。以上で、読み・書き・計算と呼ばれる道具学習について高等学校の水準までの近道を提供するようになった。

もう一つ見落とせない点がある。公文公と毅は、1990年からスイス・レザンのKumon Leysin Academy of Switzerland (KLAS・スイス公文学園高等部) というボーディング・スクールを経営していた。誇り高い伝統的ヨーロッパ型の寄宿学校だ。また、1993年から横浜市に公文学園中等部・高等部校を設立した。中高完全一貫制の進学校で、寮を併設した。つまり、

後者は6年間、前者は3年間の生徒の共同生活、成長と学習の全体を一括する学校である。通常の通学校の場合は、生徒の生活や塾その他に関して家庭と学校とはお互いに独立しているから、その間にジレンマが生じてものがられない。それに対して、寄宿学校は基本的に全面的教育である。だから、学校側の負担は重い。しかし、教育の理念は実現しやすい。公文親子はあえて寄宿学校を選択した。

この項をまとめよう。公文公は、わが子穀のための計算学習システムを発明し、そこから家庭教育に発展させ、「あれもこれも教えるというのではなく、何を教えないかということ的大事にして、あとは学校に任せる教育法です」(公文公 [1991] p.246)を経て、結局、公文公と穀は中学校・高等学校を取り込んだ前例のない教育事業を作り上げた。そこから公文公の行動を俯瞰すると、17,000人の指導者と3,000人の社員を率いたフランチャイズ教室事業の経営者の姿とは対照的に、リベラルな家庭教育の立ち位置は最初から、学校そのものと、家庭教育に対する学校教育との関係だけではなく、子どもの教育全体を秩序づけようとしたものであった、ということが明らかになる。そこに見える構図は、家庭と学校と図書とを理性的に連携させて、子どもの自律を見据えた公文父子の描いたビジョンであった。

3. 3 Made in Japan の教育システム

3.3.1 公文式における教育効果の源泉とイノベーションの動力

前例のない広がりと規模を擁する教育事業に発展した公文式の、教育システムのエッセンスは何であったのかを4つの先行研究資料で検討しよう。

3.3.1.1 なぜ公文式は普及し、どのような教育技術であるのか — Shoji Shiba⁹⁾ による分析 Siba によれば

(図3-3で示すように) 公文式で学習した生徒は、確実に学校で教わる算数の学習内容を理解できるようになる。そして、さらに学校より先行して学習・理解を進めていけるようになるのである。この事実こそが、公文式普及の根本のまた最大の原因である。(Shiba [1986] p.309 和訳は引用者、以下同じ)

(図3-3)の横軸は公文式で学び始めてからの経過年数である。学習開始後3ヶ月から4

9) 司馬正次(しば しょうじ 1933 -)は筑波大学教授、IIASA教授、MIT教授を経て、TMQ、ブレイクスルー・マネジメントの権威として世界的に活躍中。2002年デミング賞本賞を受賞。2006年ハンガリー共和国の国会から「大十字勲章」を授与された。最近、インド大統領の招きでインド製造業経営幹部育成支援(VLFM)プロジェクトを指導。

年間の生徒を示している。(図3-3a)の縦軸は、学校の教育内容と比べたとき、どれだけ公文式での学習内容が先行、または遅れているかを示したものである。公文式による学習はほとんどの場合、現在学校で教わっているよりもはるかに遡った進度から

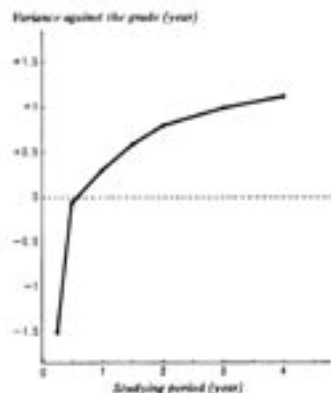


Figure 2.1a Kumon students' average grade of study versus their school grade

図 3-3a

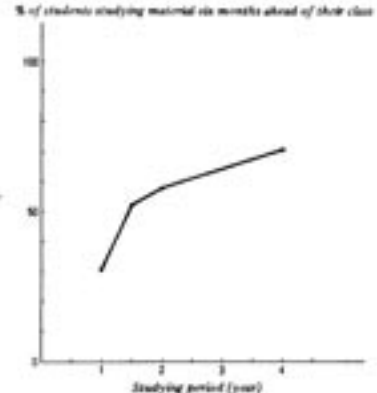


Figure 2.1b % of students studying material six months ahead of their class

図 3-3b (出典 Shiba [1986] p.309)

出発する。平均で1.5学年以上も下の内容から出発している¹⁰⁾。しかしながら、半年たつと現在学校で教わっている学習内容とほぼ同じ所まで遅れを取り戻す。そして、その後もメキメキと進んで学校での教わる内容よりも先行する生徒が多くなる。

(図3-3b)を見ると、学校より0.5学年以上公文式の進度が先行している生徒は、公文式学習開始1年で31.0%, 1.5年後では52.3%, そして2年間公文式学習を続けると58.2%と半数以上の生徒が学校でまだ教わっていない内容を学習している。しかも、公文式での学習は、学校教育とは異なり、教材進度の前進は完全理解の上に立っていることを強調しておこう (Shiba [1986] p.309)

とした。さらに、母親達のニーズに対して

母親の77%は「満足」または「かなり満足」と答えている。(中略) 学校教育の学習では多くの場合、子どもたちに嫌悪感が強いのと対照的に、公文式の場合では、学習する子ども自身も喜んでいるのである。(Shiba [1986] p.311)

ではなぜ公文式で子どもの学力がメキメキ伸びるのであろう。それは、この教育の背後に存在する4つのシステムにあるとShibaは言う。

10) (前出 注4と同じ) 中学1年生が6月から公文式算数・数学を学習し始めた際の出発点のバラツキは、G教材(学年相当)から6%, F教材(小6)から10%, 以下同様にE 41%, D 23%, C12%, B 6%, A以下2%であった。(公文 [1977] p.17)

それらのシステムは、教育のバラツキを少なくする3つのシステムと、教育システム全体を常に改善向上していくひとつのシステムからなる」「注目すべき点は、教育のなかに科学的なバラツキ管理の方法論を導入した点である（Shiba [1986] p.312）

という。4つのシステムを図3-4で示そう。

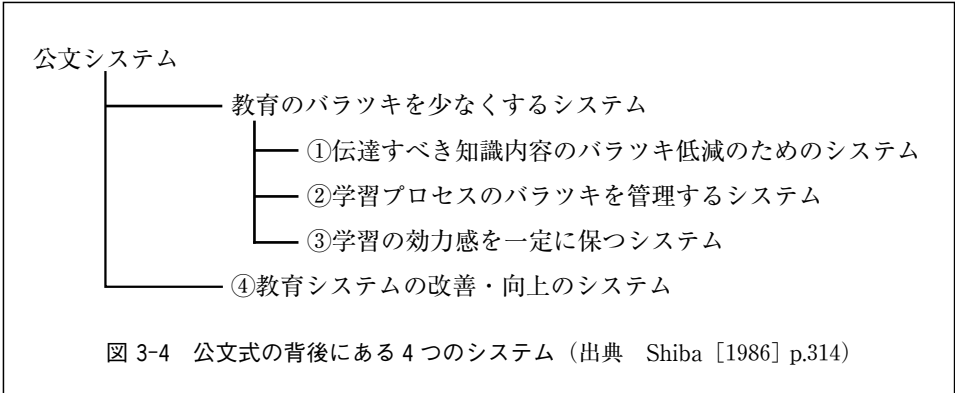


図 3-4 公文式の背後にある4つのシステム（出典 Shiba [1986] p.314）

上図の①伝達すべき知識内容は、微積分をゴールとしてそれへの到達に内容を限定し、教材のデザインがゴールからの下降方式である点、また単線型のスモールステップであること。

表 3-1 教材構成の特色 階段型から一直線のスロープ型へ（出典 Shiba [1986] p.315）

	なぜこの方式をとったか	原理	学校教材との対比	メリット
教材の目標は微分積分	さらに先に進むための主要な課題	重点指向 省略化	文章題：小2/3 図形：小削除，中1/2 単位：なし	総学習時間を短縮する
下降方式	省略：ゴールに関係しないもの 追加：次工程に必要なものは問題を増やす	最適化	3桁×3桁，少数 足し算，分数	ゴール到達前の挫折が減少する
単線型	子どもにとっての難易度について問題配列に自然な順序がある	順序化	スパイラル型を排し， 領域等に集約している	努力の積み重ねが 累積的に貢献する
スモールステップ	楽に乗り越えられる閾値が存在する	人間化	7A～P 23段階 各1～200番	小さな努力で楽しみながら進める

②学習のプロセスは、標準的な進度から子どもの実際の進度を乖離させる要因を常にチェックし、その乖離をなくすためのアクションを行う3つの仕組みを働かせること。3つの仕組みとは、i) 教材1枚ごとの標準的な完成時間（全問正答となるまでの時間）が設定され、ii) 教材段階毎の終了テストと学習状況一覧表、そしてiii) ゴールに至る進度モデルである。

表 3-2 ②学習のプロセスのバラツキ管理システム（出典 Shiba [1986] p.318）

しくみ	その目的	構成要素	歩み
標準完成時間	楽しく学習できるレベルのバラツキを少なくする	解答単位の完成時間	一枚ごと
終了テスト 学習状況一覧表	・教室間のバラツキをなくす ・個人に与えられている教材が集団でみた<ちょう ど>に近いか	・解答単位の完成時間 ・得点	段階
進度モデル	・生徒の進度の進め方のバラツキをなくす ・全公文生徒の進度の進め方のバラツキをなくす	・月毎の解答枚数 ・教材段階 ・能力	ゴール

③学習の効力感は、3.3.1.1 のはじめで引用した「子ども自身も喜んで学習する」点にある。「つまり、子どもたちが自分の学習の効力を実感として味わいながら学習していく。この点こそが公文式の、他の教育システムに勝る最大の特徴と言ってよい。したがって、子どもたちの効力感を高い水準に保ち、それが下がることのないように管理するためのシステムが必要となる」（Shiba [1986] p.317）。それは、常に教材が全問正答となるまでの時間を計測し、標準完成時間と比較して状態を評価し、指導者はとるべきアクションを起こす。もし完成時間が標準幅の<ちょうど>のなかにあれば自学自習を進めさせる。もし、<ちょうど>よりも短ければ易しすぎて学習に集中できないのだから、指導者は先のレベルへ進ませる。反対に、完成時間が<ちょうど>よりも長すぎる場合は難しく感じているのだから、指導者が徹底して教える・復習させる・教材のレベルを下げるなどの介入によって調整をする。これらのシステムによって指導者は高い水準で制御することが可能である。

表 3-3 ③学習の効力感を一定水準に保つ 標準完成時間（出典 Shiba [1986] p.318・一部改変）

公文としての状態	生徒の学習状態	状態を発生させている原因	状態を測定する尺度	指導者のとるべき行動
Bad	難しく感じて学習をやめる	・ヒントを与えられても ①間違いの箇所を発見 ②解答ができない		・指導者が徹底して教える ・下のレベルへおろし復習させる
Good	楽しく学習を続けている	・ちょっとヒントを与えれば自分でも上記①②ができる ・ちょうどで楽々	<ちょうど>	・自学自習を進めさせる
Bad	飽きて学習をやめる	やさしすぎて学習に集中できない		・指導者が先のレベルへ進ませる

そして、④教育システムの改善・向上のシステムは、2つの管理指標である標準完成時間表の改訂と進度モデルの改訂によって行われる。この基本指標は毎年改訂される。

表 3-4 ④教育システムの改善・向上のシステム（出典 Shiba [1986] p.320）

修正項目	ねらい	尺度	接近の方法	頻度
標準完成時間	標準の幅を「ちょうど」に近づける	・生徒が止めた（どの段階で、彼は止めたか） ・進むのに多くの復習が必要	悪さを発見する立場で「ちょうど」に取り組む（生徒が学習に喜びを発見する条件を強化する）	・年1回 ・教材改訂の都度
進度モデル	可能な限り短時間で学習を完成させる	高い進度例を分析…繰り返しの多い損失を発見	良さを発見する立場で取り組む（生徒の可能性を広げる条件を強化する）	・年1回

続けてShibaはいう

今までに述べたことにより公文式は、科学的な管理を教育の領域に持ち込んだことが明白になる。標準から生徒のバラツキを理解することによって、そのバラツキを減らすために仕組みを考案し、Plan-Do-Check-Actionのサイクルを続けることによって全体のシステムを上方へ螺旋を描いて進むように改善した。これは、原理的に工業における品質管理と同一である。従って、それは教育の工業化による革新と呼ぶことができる。

しかしながら、教育の革新は、公文式の前にも起こって、いくつ

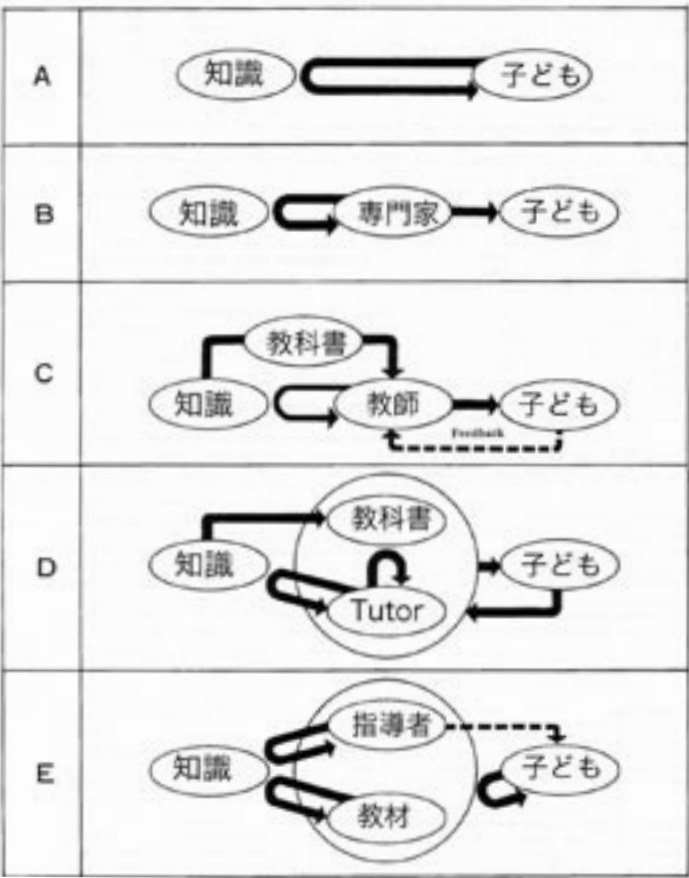


図 3-5 教育におけるイノベーションの進展
（出典 Shiba [1986] p.321）

かの段階に分けられることができる。これらは、(図3-5)で示される。教育で最も原始的なタイプは、おそらく、子ども自らが自然に知識群に取り付いて、自力で知識を学習した方法であった(図3-5 A)。しかし、これは非効率的だった。そして、個々の能力の違いがそのまま反映された。

教育専門家の出現は、重要な革新で(図3-5 B)、教育の効率を高めて、伝達される知識のバラツキを減らした。しかし、専門家の力量のバラツキが問題になった。

教科書の出現は、もう一つの革新である(図3-5 C)。教科書は、生徒への教え方のバラツキは減らされた。しかし、学習する生徒の能力の違いは、そのままにしておかれた。

教育のさらなる革新は、知識を吸収する各々の子どもの能力の違いを補正することを意図する。その第一歩は、さまざまな教科書を使用して授業をおこなうチュートリアル型の発生であると言われる(図3-5 D)。一定不変の教科書を使用した授業(図3-5 C)が一斉に全てを与えたのに対して、生徒の能力にあった教科書は質問と考察を伴い、個別化の技術に進めた。しかしながら、チューターの負担は非常に大きい、そのうえ、この方法のコストは非常に高価で個々の子どもに応じることが難しい。

公文式は、この状況を正す一つの革新である(図3-5 E)。チューターの役割は上述したように特別な教材に取り替えられ、カウンセリング的なわずかに残された機能は指導者の手に託される。学習するプロセスとその効果を調節する仕組みは、(図3-5 A)における子ども自身による学習を、指導者によって管理された環境の中で自学自習を促進することを可能にした。それは狭い領域かもしれないが、算数・数学で、特に微分と積分を目標とした教育の工業化の水準を上げるために、実際に必須の内容を持っている。公文公は、それを発明した。(Shiba [1986] p.319-321)

公文公は、ただひたすら子どもを見て、子どもから学んで、解を考えだして行った。ただし、一般的教師との違いは、「悪いのは子どもではない」(公文公 [1994] 229p)のだから公文公は自分の掌中にある教材と指導法システムの方を慎重に変えた。そのための技術が Shiba によって明らかにされた。それはまぎれもない科学であった。だから、教育のイノベーションとなった。

3.3.1.2 公文式が普及したもう一つの理由と問題点 — 辻本 雅史¹¹⁾による分析

教育史の研究者である辻本 雅史は、著書『「学び」の復権—模倣と習熟』で、その最終章の一節を「公文式学習」と題していた。

11) (つじもと まさし 1949 -) 京都大学大学院教授 文学博士 著書に『近世教育思想史の研究』思文閣出版など。

公文の学習方式は、江戸時代の手習塾（寺子屋）の学習方法と原理的な点で変わるところがない。もとより個別学習・自己学習の方法が貫かれており、まさに「滲み込み型」の学習¹²⁾にほかならないのだ（辻本 [1999] p.193）

と結論づけた。その理由は、

（様々な特長を検討したうえで）こうした公文の学習システムは、原理的に見るかぎり、（貝原）益軒に見た学習の原理と驚くほど共通している。自己学習の原理、見えない教育、「立志」（意欲、やる気）と子どもたちをとりまく環境の重視、繰り返しと習熟、継続性、さらに早期教育の提唱なども加えてよいだろう。（辻本 [1999] p.203）

だから「公文式教室の学習方式が日本の社会に広く受け入れられていった一つの理由に、本書でたどってきた伝統的な学習文化と強い親和性があった」（辻本 [1999] p.203）のだという。

公文公が益軒の原理を意図して取り入れたとかどうかは今後の研究に待たなければならないが、公文公の教育システム・デザインが、いまの日本の教育と文化の中に「滲み込み型」の教育を掘り起こしたという指摘は注目しなければならない。しかも、公文式は日本の伝統的な学習法に根ざしているけれども「必ずしも日本的な日本固有の学習法と考える必要はないのかもしれない」（辻本 [1999] p.202）。むしろ、近世までの日本の教育文化が洗練し普遍性をおびさせた学習法といえるのではないだろうか。この点については、後でも検討する。

さらに、辻本は「公文式学習は一見いいことづくめに見える。しかしもちろん問題がないわけではない」（辻本 [1999] p.203）として、まず、受検体制への組み込みを指摘した。それは

学力をめぐる競争は、公文の場合「進度一覧表」に凝縮して示される。幼児から高校生まで、到達度を個人別に記録し、これを「進度一覧表」として、全国レベルで学年ごとにトップから順に、到達度にしたがって腹位をつけ、三か月ごとに公表している（辻本 [1999] p.204）。

これに対して「進度一覧表」に関する公文教育研究会側の説明は、

この「表」の真意は、子どもたちが伸びていくようすをつねに把握し、子どもの持つ可能性の高さを確認していくことにある。「ここまで伸びることができるはず」という目標を

12) とりたて指導の場面で、欧米型の「教え込み型」(instruction model) に対して日本型の「滲み込み型」(osmosis model) が認められると、東洋 ([1994] p.123) が発達の日米比較研究の結果をもとにして述べている。

教育者がたえずもつこと、そして、「もうこれでよい」と、自分の指導技術に満足することなく、たえず技術の向上をめざして努力、自己の研鑽を重ねていくことを、最大の存在意義としているのだ。(公文公・岩谷清水 [1993]『新「公文式算数のひみつ」』p.184)

「たしかにそれが本来の意図であるに違いない。しかし、「進捗一覧表」はともすれば本来の意図をこえて機能する」(辻本 [1999] p.204)と厳しい。続けて問題を指摘して、

こうした競争シンδροームを加速させる戦略を、ある時期、意図的にとってきたことも指摘しておかなければならない。(中略)それは教室「指導者」の「成績」を顕在化してしまう。おのずから教室間競争が意識されていく。(中略)こうなると自己学習という「惨み込み型」学習本来のあり方が、もはやどこにも見当たらない。本人の学力と意欲に応じて、自分のペースで、必要な時に必要なだけ学ばよという原則は、見失われてしまっている。それどころか、逆に子どもに無限に学習を強制するシステムに変貌している。(中略)これは公文式が採った学習方法自体の罪ではない。罪があるとすれば、この学習システムを、現代の受験学力競争の世界に組み込んだこと、そしてその学習システムを教育ビジネスという企業の論理で再編したことにある、といわねばならない。(辻本 [1999] p.207-208)

辻本が指摘した受験競争に組み込んだことは、ブレイクスルーに伴う典型的な副次現象の一つではないだろうか。公文式が右手で差し出した新しい学習方法を、親たちは左手で受け取って古い受け身の構えのままですべて使ってしまった。受け取り側が認識不十分で不慣れであったのだから、もちろん提供側の不備である。もし、同じ次元の変化の範囲であったならばこのような齟齬は起こさずにすんだのではないか。

辻本は、この社会から蒸発してしまったかのように見える個人別で惨み込み型の教育であるが、近世からの「学習文化」の伝統を現在の公文式によって見直していた。

3.3.1.3 公文式算数は応用力につながるか — 吉田 甫¹³⁾による分析

教授心理学と認知心理学が専門の吉田 甫は、著書『学力低下をどう克服するか—子どもの目線から考える』で、重要な研究結果を報告している。教育の目的の一つである、未だ学習していない問題に出くわしたときに、学習したことを利用して解決できるかというテーマである。

13) (よしだ はじめ) 宮崎大学教授を経て立命館大学文学部教授 教育学博士 教授心理学、認知心理学を専攻 著書は『子どもは数をどのように理解しているのか』新曜社など。近著は『子どもの論理を活かす授業づくり』北大路書店。

これは心理学で「転移」といわれる。なぜ転移が起こるかについては、最近のメタ認知論も加わって議論が続いている。原田・吉田〔1977〕の研究は、

公文式教室で算数教材を少なくとも2年間にわたって学習している小学1年生から6年生までの子ども合計128名（以下、公文群と略）と、公文も含めて学習塾に通っていない小学1年生から6年生までの子ども合計219名（以下、公立群と略）を比較した。

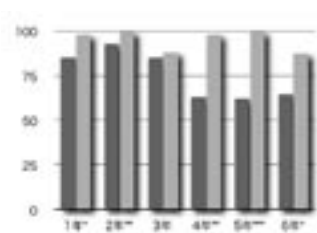


図 3-6 計算問題

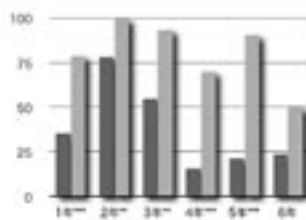


図 3-7 文章題

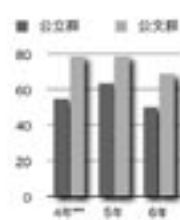


図 3-8 分数大小

（出典 原田・吉田〔1997〕p.50-52をもとに引用者が作図）

その結果、（図3-6）計算問題ですべての学年で、公文群が統計的に優位に高い成績を示した。（これは当然である。）

つぎに、文章題の問題に対する結果は、（図3-7）に示されているとおりである。公文群は、文章題を公文式教室では学習していないので、その点で公立群との差はないと考えられる。しかし、図から明らかなように（中略）、計算を主体に学習することは、文章題の解決にも望ましい効果を上げていることが伺える。

もう一つだけ、結果を示そう。それは、分数の概念に関するもので（図3-8）に示されている。ここでの結果は、計算問題ではなく、分数の大きさの判断など、計算とは異なる側面に関する問題の結果である。（中略）

このことから、反復練習は転移、言い換えれば応用力をつけるという結論を引き出してもよさそうだ。（吉田〔2003〕p.225-231）

吉田は様々な留保を置きながらであるが上記の結論を導きだした。これは、実験室の中におこなわれた短期間の学習実験による結果ではない。実際の子どもの学習で、しかもかなりの長期間にわたる学習において、転移（応用）が見られるかどうかを検討している点で極めて貴重な報告である。

公文公は、当初この転移（応用）を不思議がり、やがて算数・数学一科目の教室であった1980年までの20年余りは「ほかの科目も自然に向上する」（公文〔1974〕p.17）といていたが、事例としてあげるだけにとどめて、科学的に解明される時を待っていた。吉田によって公文式

の繰り返し学習の意味が示された。

3.3.1.4 公文式は「場」を働かせたか — Ikujiro Nonaka¹⁴⁾ らによる分析

知識経営の生みの親である野中 郁次郎らは、知識が最も重要な経営資源である Knowledge-based economy においていかにうまく知識を創造し管理するかにあと説く。日本企業の知識管理に注目し、合宿や飲み会などの「場」を通して暗黙知を共有し、暗黙知の形式知化を促す知見設定を挙げる。著書 *Managing Flow: A Process Theory of the Knowledge-Based Firm* では、トヨタ自動車、Canonらとならんで公文教育研究会を取り上げた。(要約と翻訳は引用者による)

教材と方法：

- ・公文式の優位性は、マイペースの設定にある。学校と対照的に、公文式は「多数の経験を通しての暗黙の理解」を奨励する。生徒は、原理と概念を spontaneously に学ぶ——多くの計算を反復練習することで。彼らは doing によって学ぶ、そして、より重要な段階では、彼らは問題を解決する方法の例を与えられる。より困難な問題は、異なる種類の質問とより多くの練習を用いたいくつかのステップに分けられる。さらに面倒で、抽象的な概念は自然に反復練習を通して把握される。これは、この方法の鍵となる要素である。これらの要因の組合せは、生徒が対象事項の暗黙知を得るのに役立つ。
- ・公文式のエッセンスは人間関係の重視にある。「ちょうど」の実現は生徒と指導者の相互作用だから。(Nonaka *et al.* [2008] p.123)

公文式の特徴：

- ・公文式は教育産業の先端モデルである。
- ・公文式固有の強さは3つの面にあって、最初は、システムである。それぞれの個人に、そして、実際にテラーード自己学習の教材を開発し、しかも、それを言語学習や他の国と文化向けに容易に転換できること。

第2は、個々の生徒を気にかける、指導者の養成である。教育産業において、提供されるサービスの質は、無形で、それを提供している人の質に依存する。個別の状況によってタイムリーおよび適切な判断をする指導者の能力は最も重要である、そして、そのような能力と公文式指導者の共有経験は最も重要な知識資産と会社のための競争優位源である。

14) (のなか いくじろう 1935 -) 経営学者 一橋大学名誉教授、カリフォルニア大学バークレー校経営大学院ゼロックス知識学特別名誉教授 知識経営の生みの親として知られる。

第3は、サービスを持続的に改善することを可能にする、必要な深さでコミュニケーションする「場」の存在である。その「場」は、指導者の訓練と研究グループの形で、指導者の実際の経験が教育の連続改善のために、さらに地域の社会で若い母と年輩者をサポートして、教育を通して社会的関係を強化することになる。

- ・以上、公文式の価値は、説明で明らかになるのではなくて、効果的なサイクルで知識を連続的に拡大することによって解るようになる知だ。知は、学習者の学習経験と指導者の指導経験の間に複数の「場」があり、公文の哲学によって導かれた連続相互作用を通して指導方法と教材が持続的に改善される。(Nonaka *et al.* [2008] p.131-132)

公文公は、彼が追求し掘り出そうとした子どもの可能性を実現するために様々な「道具」を繰り返し創造することが必要であった。Nonakaらを取り上げた「場」も公文公が目的のためにイノベーションした手段の一つだといえるだろう。おそらく、個人別でちょうどの教育を公文式に出会う前に経験したことがない公文式指導者が、本当の「ちょうどの学習」を実践するためには、通常の情報伝達型講習だけでは不十分だったはずである。

3. 4 公文式のグローバル性

3.4.1 母語教育と推薦図書

スズキ・メソッド¹⁵⁾ (才能教育研究会) がMade in Japanの教育法を世界展開した嚆矢である。スズキ・メソッドの創始者である鈴木鎮一¹⁶⁾が、1964年以来、日本製の教育システムを海外の子どもたちに普及した人として広く知られている。『キラキラ星』に始まるヴァイオリン、チェロなどの楽器による早期教育である。小さい子どもたちによる見事なアンサンブルは、P. カザルスをはじめ西欧の人々をゆさぶった (鈴木 [1966] p.212-221)。その結果、楽器演奏の開始年齢がそれまで8, 9歳であったものを2, 3歳からに早めてしまった。その影響は世界的であった。さらに、その効果はスポーツ界にもおよんでいる (宮下充正 [1980] p.160)。スズキメソッドは西洋音楽の逆輸出といえる。

一方、公文公の独創性は世界共通の算数・数学だけでなく、英語圏の子どもたちに公文式で

15) (Suzuki Method) 音楽を通じて心豊かな人間を育てることを目的とする教育法 (音楽教育が本来の目的ではない)。国内生徒数: 16,962名 指導者数: 885名 (2010年5月現在) 海外は少なくとも44カ国、生徒数約40万人以上といわれる。映画『ミュージック・オブ・ハート』[1999]はアメリカにおけるスズキメソッドの実話として有名。

16) (すずき しんいち 1898年 - 1998) ヴァイオリニスト スズキ・メソッドの創始者 世界的には音楽教育家および教育学の理論家として著名で、とりわけアメリカ合衆国で高く評価されている。『鈴木鎮一全集』研秀出版1989がある。

母語である英語を教えたところにある。しかも英語だけではない。現在公文式の母語教材は11言語、25の国と地域に及ぶ（日本を含む）。しかも、公文式において、日本の国語教材とすいせん図書が一体化されている様に、海外の母語教材とすいせん図書はセットで普及推進しているという。母語の壁をブレイクスルーした。公文式による第2のブレイクスルーである。その結果、算数・数学だけでなく読み・書き・計算という道具学習がグローバルに提供可能になった。日本の公文式が世界の KUMON に変身した。

グローバルとは必ずしも単一ではない。公文式の算数・数学は、基本的には全世界が同じ教材を使う。わずかな記号表現と翻訳した指示文の違いしかないし、計算問題のアルゴリズムは同じだ。しかし、母語教材は単純ではない。最も深い層にある教材理念は一つであるけれども、それぞれの教材の設計思想はその言語に密接しなければならない。だから、いわゆる翻訳はこの設計思想の層でおこなわれ、他の言語用の設計思想と対比してようやく検討可能になる。さらに、それ以降の具体的な母語教材の作成は、完全に現地で、教材理念と設計思想を踏まえたネイティブ・スタッフによって文字・語彙・文が選ばれ、言語に即して自由に構成されなければならない。そのうえ、実施後は検証と改訂もグローバルのガイドラインによって、言語毎に行わなければならない。

英語はUS版（US、カナダ、フィリピン）と国際版（UK、オーストラリア、アジア、アフリカの諸国）の2種類、中国語は3種類あり多様だ。スペイン語とポルトガル語も本国版と海外版はわかる。しかも、英語US版でUS・カナダの「すいせん図書」はフィリピンではちょうどではない。もしかすると英語国際版は、将来、18もの「すいせん図書」を抱える必要があるかもしれない。しかも、ブックリストの本国への逆輸出である。公文式も、グローバルにおける単一化と多様性の両極を内包する。ディレンマに陥らない技術と管理が必要である。

下図は海外で作られた「くもんのすいせん図書」の例である。図3-9 は英語国際版（オーストラリア他17カ国用）の冊子体。図3-10 は中国語簡体版（香港、シンガポール、マレーシア用）。裏面のG段階では、老舍の『駱駝祥子』、漱石の『我是猫』が上位にランクインしていた。

おそらく、「くもんのすいせん図書」におけるグローバル性は現在の水準で止まらなないと期待できる。脳科学という学際的研究の牽引役経験を踏まえて小泉英明（[1999] p.110, 112）は、「（グローバル組織は）密接に関係する多くの分野にのみ基づいているので、期待したほど機能しないことがよくある」また「既存する分野の架橋または融合を確立するためには、卓越した学者が必要である」という。トップダウンのグローバル・デザインが成功するためには、ローカルの壁を越える方法論がどうしても必要である。公文公には、グローバルな「すいせん図書」作りにも「卓越した」解決法があった。



図 3-9 くもんのすいせん図書 英語国際版（冊子体）

3.4.2 ちょうどの追求

教育システムを開発・改善しようとしたときに発生した困難を越える具体的な方法を、公文公は示している。例えば、「すいせん図書」一覧表は、「ここから探してごらん。きっと君が夢中になって読める本に出会えるから」と子どもに発信していなければならない。けれども、効果あるブックリストは始めからつくれるはずもない。

公文公はすいせん図書一覧表の作り方をこうあかしている。

漱石の作品とか、『次郎物語』、『にあんちゃん』などを読ませたいと思ったときに、それぞれの間に何と何を入れていけば、子どもが無理なく読んでいけるか。そういうことを考えて作った（公文 公 [1989]）

という。具体的にはまず、中点法といわれる数学思考で候補をえらび、

最初はどうでもいいから作ってしまえばいいのです。（中略）大切なのは、その後いかに子どもにききながら改良していくかです。（公文 公 [1985a] p.291）

公文式简体字版中文推荐图书目录(1)

[illegible]

© 2004 Kumon Institute of Education Printed in Malaysia

■ 书名后标有“ ”的地方表示该书的内容与玩有教材课文的内容相关。

図 3-10 くもんのすいせん図書 中国語簡体字版

公文公は一貫して、子どもに合わせて教材や指導法を改良してきた。この開発手法もまた公文公の発明である。それは、Alvin Tofflerが予見したプロシューマー¹⁷⁾と重なる。ではなぜ、いち早く独自にプロシューマーに行き着いたのか。

子どもはとても賢くて、自分がどんな状態かをよく知っています。そのため、いつも自分にちょうどあったものを求めています。ちょうどのものであれば、自分からどんどんやっていきます。(中略)大切なのは「大人からみてちょうど」でなく「子どもからみてちょうど」であり、どの子も自分にちょうどのことを感覚的に知っているようです。そして、子どもにききながら、ちょうどの追及をしていくことが、教育の仕事の本質ではないかと思っております。(公文公 [1985a] p.291)

初めは、「それは例外的なものだろう」と思っていたことが、いろいろな子どもたちに実験してみると、ほとんどの子どもにも言えることはたくさんありました。(公文公[1985a] p.292)

当会では「90%は指導要領どおりにやり、あとの10%はわざとはずせ」と言っています。公文の教材も指導要領も毎年かえていますが、もっといいものはいつもあるからです。(公文公 [1985a] p.293)

子どもたちにきき、教わることが上手になってくると、新しい可能性の発見が常にあります。その発見を先入観にとらわれないでやってみれば、子どもは飛躍的に伸びるようになり、「今まで一体、自分は何をやっていたのか」の反省ばかりとなります。(公文公[1985a] p.293)

公文公のゆるぎないオリジナリティの源泉は、子どもから見た「ちょうどの追求」といえる。つまり、公文公が用いた方法論を応用すれば、次のようなことが可能だ。たとえば『はらぺこあおむし』がほとんどの国や地域の「くもんのすいせん図書」に登場する」というような事実あったとしよう。そのような事実を発見して、その観点で探索して該当する点数を増やし、さらに年齢幅を拡げる拡充をていねいにしていけば「グローバル・コア（核となる）・ブックリスト」ができる。

17) Alvin Tofflerによるproducer（生産者）とconsumer（消費者）を組み合わせた造語で『第三の波』[1980]が初出。多様化した消費者のニーズに応えるために、消費者が商品の企画・開発に直接的に関わること。

もう一つ例は、それぞれ言語もストーリーも、もちろん作家も異なるが、読者である子どもにとってテーマまたはアウトカムが同一・共通である本や作品のブックリストを作成可能である。

さらに、方向を反対に向けると、それぞれの民族・文化固有のかけがえのない「かたり（口伝）」を収集したブックリストも必須といえるだろう。

これらの例で示したように、公文公の方法は、小さい特異点をつまんで、よく見て、次に広く見渡して探し出し、それと現場との相互作用を丁寧に検討して仮説を作って検証する。その繰り返しを子どものちょうどに到達するのに必要なだけ繰り返す。当たり前を徹底した卓越性であった。

また、これらの機能的ブックリストができあがれば、少なくとも出版業界への影響を持ちうると思える。

さらに、海外のブックリストは国内で経験してきたのと基本的に同じ機能効果を期待できる。結局、人づくりと国づくりに役立つ。そしておそらく、それだけでなく、例えばグローバル・マーク付きの数冊が、子どもたちの間に確固たる共通の絆となって inter and multi-culture を促進するにちがいない。

4 考 察

第一に、公文式教育とそれを創って現在の姿にまで牽引した公文公の仕事をやや詳しく見てきた。50年間で、一人から430万人を超す量的な成長もさることながら、それを可能にした様々なイノベーションの絶え間ない繰り返しとブレークスルーとがあったことを明らかにした。現時点でふり返ってそれらの改善と変革が最適であったか、また、挫折したイノベーションとそのマネジメントは何かまでは取り上げていない。その点で企業研究としては不十分であるけれども、むしろ教育におけるイノベーションの具体例として見たとき、公文式の経過は際立っていた。また、一連の維持、改善、革新のリーダーシップにおいても興味深い事例であった。

また第2に、公文式教育システムに関して、様々な領域の研究者がそれぞれの専門から分析した結果をみた。共通する視点は、子どもの学習をどのように支えるかにあった。この視点は自然にわが国の今の教育に向かう。

公教育のイノベーションは、一方で、これまで80年も前のネズミとイヌなどの動物実験による心理学を基にした教育理論と、勘と経験に依存した教育方法を脱却しなければならない。他方で、きちんと人間の「子どもの論理」による教育の基礎理論がJohon D. Bransfordらによって「Learning Science」として構築されつつある。教授＝学習について、デザイン実験研究または教育実践心理学も有効な基本を提供できるようになるという。理論に裏打ちされたカリキ

スラムや学習方法の展開が待たれる。

教育は孤立しているのではなく、反対に様々な領域分野との有機的な関わりのうえで成り立っている。それにもかかわらず、これまでに多領域の研究者が教育に関する一つの問題を総合的に検討した例をほとんど知らない。行き詰まりを指摘されて久しい学校教育は、その糸口がいまも見えない。糸口は、むしろ専門家がその専門性で教育改革にコミットすることで作られるのではないだろうか。その可能性が、本稿によっておぼろげに見えてきたというのは手前味噌に過ぎるであろうか。少なくとも21世紀前半の教育の設計チームは、学校教育プロパーに任せるだけではなく、また、素人を集めた審議会などでお茶を濁すだけでもなく、「教育」全体を覆う多領域のそれぞれをを「架橋・融合する概念を含む環学性（trans-disciplinarity）」（小泉〔1999〕 p.112）を帯びなければならない。そのマネジメントは困難が予想されるが得られないわけではない。

最後に、教育のイノベーションを、限られた部分ではあるが成功させた公文公の子どもの能力観と子どもの学習観は特筆しなければならない。もとより日本の公立学校の多くが未だに堅持しようと徒労を重ねている「伝統的学習観」と「一斉主義」の外にあるが、公文公が学校を否定的に見るところは全くない。その点で、過去にいわれた「子ども主義」または「脱学校論」ではない。「子ども中心主義」でもない。前述の「子どもの論理」に通じるが、最も近いのは、波多野誼余夫らが『知的好奇心』など一連の認知心理学を創りあげた途上で説いた「学習者中心の教育」（波多野誼余夫ら〔1973〕 p.133）の「あたらしい学習観」であろう。

5 まとめ

公文公による教育におけるブレークスルーを俯瞰して、今後の教育が個人と社会とに貢献するためには、第一に、個別教育を見直す可能性が広く存在することがあげられる。公文式が国内だけでなくグローバルに受け入れられたのは、それを示していたといえる。

その第二は、やや具体的であるが、機能的推薦図書の開発とその目的的活用が望まれる。公文公がブックリストに対して、従来の単なる図書紹介または販売促進を脱皮させて、子どもたちに図書の選択と配列に明確な利便性を与えた方法は機能的活用の一つであった。そのほかの目的を付加した活用法は比較的容易に実現すると考えられる。今後は、子どもたちのための機能的ブックリストの研究と開発を進めていきたい。

公文公による教育のブレークスルーのための技術的原点は、子どもにとっての「ちょうどの追求」であって、それを「子どもにきくこと」によって実現していた。原点の背後に広がる子ども観と学習観は、「学習科学」とともに21世紀前半の教育のために科学的な基礎を提供している。

謝 辞

本稿について全面的にご指導をしてくださった山本順一教授にお礼を申し上げます。また、公文教育研究会のご快諾でこの研究を始めることができました。資料の提供と取材について窓口をつとめていただいた東京広報デスクの山崎さんと、様々な面から取材に協力してくださった公文公教育研究所の大西さん、木田さん、久保さん、重野さん、中江さん、新倉さん、廣田さん、柳田さん、公文教育研究会の田崎さん、鎮西さん、八田さん、日本公文教育研究会の伊丹さん、岩田さん、大野さん、佐々木さん、中村さん、牧井さん、深谷さん、くもん出版の新村さん、谷さん、長谷さんと才能教育研究会の林さんに感謝します。

引用文献一覧

- Kinoshita, Reiko [2008], *Learning for Life—The Kumon Way*, I-House Press, Tokyo
- Nonaka, Ikujiro ; Toyama, Ryoko ; Hirata, Toru [2008] “Ba: KUMON Institute of Education Co., Ltd” *Managing Flow: A Process Theory of the Knowledge-Based Firm*. Palgrave Macmillan, New York
- Shiba, Shoji [1986] “The Excellent Education System for One and a Half Million Children,” *PROGRAMMED LEARNING and EDUCATION TECHNOLOGY*. Vol.23 No.4. P.306-330 Kogan Page, London, 1986
- The Suzuki Method <http://www.suzukimethod.or.jp/indexE.html> (accessed November 12, 2010)
- グローブ、アンディ [1997] 『インテル戦略転換』(佐々木かおり訳) 七賢出版
- 東洋 [1994] 『日本人のしつけと教育—発達の日米比較』 東京大学出版会
- 木下玲子 [2006] 『寺子屋グローバリゼーション—THE KUMON WAY』 岩波書店
- 公文教育研究会 [2010] <http://www.kumon.ne.jp/kigyo/group/index.html> (accessed November 2, 2010)
- 公文禎子 [1998] 「本当の教育は個人別であり、自学自習でなければならない」, 公文公教育研究所編『心にきざむ200の言葉』, 公文教育研究会
- 公文公 [1959] 「小学生に微積分まで」 公文公教育研究所編『公文式の原典』 くもん出版
- 公文公 [1965] 「数学の学力を伸ばす指導法」 公文公教育研究所編『公文式の原典』 くもん出版
- 公文公 [1977] 『公文式の算数革命』 講談社
- 公文公 [1979] 「巻頭言」『やまびこ』 No.56, 公文教育研究会1979.11
- 公文公 [1982] 「巻頭言」『やまびこ』 No.76, 公文教育研究会1982.9
- 公文公 [1985a] 「ちょうどの追求」 日本創造学会編『創造と企業—創造性研究3』 共立出版
- 公文公 [1985b] 「巻頭言」『やまびこ』 No.95, 公文教育研究会1985.11
- 公文公 [1987] 「会長に聞く」『やまびこ』 No.104, 公文教育研究会1987.5
- 公文公 [1988] 「会長に聞く」『やまびこ』 No.111, 公文教育研究会1988.7
- 公文公 [1989] 「会長に聞く」『やまびこ』 No.117, 公文教育研究会1989.7
- 公文公 [1990] 「巻頭言」『やまびこ』 No.121, 公文教育研究会1990.3
- 公文公 [1991] 『やってみよう』 くもん出版,
- 公文公 [1993a] 「会長に聞く」『やまびこ』 No.140, 公文教育研究会1993.5
- 公文公 [1993b] 「巻頭言」『やまびこ』 No.143, 公文教育研究会1993.11
- 公文公 [1994] 『悪いのは子どもではない』 くもん出版
- 公文公・岩谷清水 [1993] 『新「公文式算数のひみつ」』 くもん出版

- 小泉英明 [1999] “A Practical Approach to Trans-disciplinary Studies for the 21st Century” OECD/CERI編
[2005]『脳を育む—学習と教育の科学』明石書店
- 司馬正次 [2003]『ブレイクスルー・マネジメント』東洋経済新報社 286p
- 週刊東洋経済 [2009]「少子化時代を生き残れ！」『週刊東洋経済』2009.1.10
- スズキ・メソッド（社）才能教育研究会 <http://www.suzukimethod.or.jp/> (accessed November 12, 2010)
- 鈴木鎮一 [1966]『愛に生きる—才能は生まれつきではない』講談社現代新書
- 辻本雅史 [1999]『「学び」の復権—模倣と習熟』角川書店
- 筒井清忠 [1995]『日本型「教養」の運命』岩波書店
- 恒吉遼子 [1995]「教室の中の社会」佐藤学（編）『教室という場所』国土社
- 日本公文教育研究会「くもんのすいせん図書一覧表」<http://www.kumon.ne.jp/dokusho/suisen/index.html>
(accessed November 12, 2010)
- 波多野誼余夫, 稲垣佳世子 [1973]『知的好奇心』中公新書
- 原田京子, 吉田甫 [1997]「先取り学習が学校での学習に及ぼす影響について」『宮崎大学教育学部教育実践センター紀要』No.4, P.43-58
- 宮下充正 [1980]『子どものからだ—科学的な体力づくり』東京大学出版会
- 吉田甫 [2003]『学力低下をどう克服するか—子どもの目線から考える』新曜社

巻末参考資料

公文 公 著書一覧

- 公文公著 [1974/12] 『公文式算数の秘密』 廣済堂出版
- 公文公著 [1976/4] 『くもんの算数』 婦人生活社
- 公文公著 [1977/8] 『公文式の算数革命』 講談社
- 公文公著 [1978/7] 『算数の成績が上がる』 ごま書房
- 公文公／倉本博子共著 [1979/1] 『悪いのは子どもではない』 公文数学研究センター
- 公文公／井探大ほか四名共著 [1979/5] 『家庭教育革命』 講談社
- 公文公編 [1979/6] 『愛の算数教室』 学習研究社
- 公文公著 [1979/10] 『勉強力をつける法』 ごま書房
- 公文公著 [1980/3] 『公文式数学教室』 公文数学研究センター
- 公文公著 [1980/3] 『2歳からのラクラク算数』 学習研究社
- 公文公著 [1980/7] 『優秀児はこう育った』 公文数学研究センター
- 公文公／鹿谷昭之共著 [1980/8] 『伸びた生徒伸ばしたお母さん』 公文数学研究センター
- 公文公著 [1981/1] 『公文式の主張』 公文数学研究センター
- 公文公編 [1983/10] 『公文式教育法入門』 くもん出版
- 公文公編 [1984/9] 『小学生でも英文が読める—公文式英語の秘密—』 くもん出版
- 公文公著 [1985/9] 『新版 公文式の主張』 くもん出版
- 公文公著 [1985/10] 『ちよどの追求』 日本創造学会編『創造と企業—創造性研究3』 共立出版
- 公文公著 [1985/11] 『公文式国語の提言』 くもん出版
- 公文公著 [1986/4] 『公文式幼児教育革命』 講談社
- 公文公著 [1986/9] 『子どもを伸ばす』 PHP研究所
- 公文公／小田林浩子共著 [1988/8] 『歌がわが子の頭をよくする』 くもん出版
- 公文公著 [1989/4] 『公文式算数の秘密（復刻版）』 くもん出版
- 公文公／河合典子／小森美江子共著 [1989/7] 『くもんのすくすくメモリー』 くもん出版
- 公文公著 [1991/5] 『やってみよう』 くもん出版
- 公文公著 [1991/10] 『二歳で本が読める』 講談社
- 公文公著 [1993] 『慣れぬ教師の商法赤字にも絶対の自信』 『創業者精神』 日経BP p.204－213
- 公文公／岩谷清水共著 [1993/7] 『新「公文式算数のひみつ」』 くもん出版
- 公文公著 [1993/11] 文庫版『二歳で本が読める』 講談社
- 公文公著 [1994/11] 『悪いのは子どもではない』 くもん出版
- 公文公著 [1996/6] 『最新版 公文式の主張』 くもん出版
- 公文公教育研究所編 [2008/10] 『公文式の原典—公文公会長『やまびこ』巻頭言全収録』 くもん出版

公文式 関係資料一覧

- Kinoshita, Reiko [2008], *Learning for Life—The Kumon Way*, I-House Press, Tokyo, 237p
- Murr, Andrew [1989] “Samurai Math Gets a Tryout” *Newsweek*, April 10, 1989 P.60
- Nonaka, Ikujiro ; Toyama, Ryoko ; Hirata, Toru [2008] “Ba: KUMON Institute of Education Co., Ltd”
Managing Flow: A Process Theory of the Knowledge-Based Firm. Palgrave Macmillan, New York,
p.107-137
- Reingold, Edwin.M. “MATHEMATICS MADE EASY” *TIME*, June 4, 1990 P. 5
- Shiba, Shoji [1986] “The Excellent Education System for One and a Half Million Children,” *PROGRAMMED LEARNING and EDUCATION TECHNOLOGY*. Vol.23 No.4. Kogan Page, London. P.306-330
- 荒木 碩哉 [1999] 「ここがちがう公文式算数教育と珠算式算数教育 ―体験学習を終えて（第45回全国珠算研究会発表）」『珠算春秋』45（1）（通号 83）[1999.06] p.154-163
- 池田 志保子 [2005] 「施設内デイサービスにおける子どもたちとの交流―公文式教具を活用した学習」『ふれあいケア』11（4）[2005.4] p.60-63
- 大西 展子 [2010] 『スイスの山の上にユニークな高校がある』くもん出版 254p
- 折田 清 [1994] 「公文式教材を使用した外国人少年に対する日本語 教育（処遇実践レポート）」『刑政』105（2）[1994.02] p.68-73
- 北山 修 [2000] 「ともにながめること 浮世絵に見る江戸の子どもたち」くもん子ども研究所編『浮世絵に見る江戸の子どもたち』小学館 p.197-200
- 木下 玲子 [2006] 『寺子屋グローバリゼーション The Kumon Way』岩波書店 258p
- 岸 俊彦 [2001] 「公文公評伝」『明星大学研究紀要 人文学部』No.37 2001.3.20 p.49-64
- 公文教育研究センター [1983] 『公文式教育の理念』（創立25周年記念）公文教育研究会（非売品）
- 公文教育研究センター [1983] 『二十五年の歩みと展望』（創立25周年記念）公文教育研究会（非売品）
- 公文 毅ほか [1997] 『どんな人間がこの時代を生きぬくか』河出書房 p.286
- 公文毅前社長追悼文集刊行委員会 [1997] 『明日への序曲 公文毅の示した道』公文教育研究会（非売品）
- 公文教育研究会 [1993] 『どこまでも 限りなく……』（公文教育研究会創立35周年記念誌）公文教育研究会（非売品）
- 公文公会長追悼文集刊行委員会 [1996] 『風のごとく 光のごとく 公文公会長追悼文集』公文教育研究会（非売品）
- 公文公教育研究所 [1998] 『新しき世紀に向けて 心にきざむ二〇〇の言葉』（公文教育研究会創立40周年記念）公文教育研究会（非売品）
- 公文公教育研究所 [2008] 『KUMON創立50周年記念』（公文公会長講座DVD, 公文公会長伝, 50年のあゆみ）公文教育研究会（非売品）
- 公文公教育研究所 [2009] 『公文式がわかる なぜ、自分で考え、自分で学び、伸びていく子が育つのか?』くもん出版 254p
- 小林 雅明 [2004] 「儲け主義がはびこる「公文式」ワンマン経営の内情」『実業界』(908) [2004.10] p.26-29
- 西所 正道 [1998] 「「卒業生」を追跡調査, “第一世代” は公文の「現在」をどう見るか? ―日本一の塾「公文式」40年目の曲がり角」『現代』32（1）[1998.01] p.232-241
- 佐々木 丈夫 [1999] 「一人ひとりの子どもたちの「小さな成長」への感動こそが原点―公文式の「個人別学習」が意味するもの」『Aigo』日本知的障害者福祉協会1999-03 46 3 p.15-18

- 産経新聞編 [1986] 『きつとうまくいくよ—公文式教室から』 産経新聞 278p
- 田上洋子, 真木みどり [1997] 「自閉性障害の早期治療」中根晃ほか編『自閉性障害の早期治療, 自閉症治療のスペクトラム』金剛出版 p.45-59
- 田中 勝博 [2008] 『「公文式・読み聞かせ・バイオリン」で子どもは天才に育つ!』東洋経済新報社 191p
- 辻 秀雄 [1992] 「公文教育研究会のアメリカ進出」『Agora』1992/2 JAL p.8-13
- 辻本 雅史 [1996] 「貝原益軒から現代を透視する」『AERA Mook教育学がわかる』朝日新聞社 p.97-101
- 辻本 雅史 [1999] 『「学び」の復権—模倣と習熟』角川書店 p.193-210
- 富永 繁男・村井 杏子 [1999] 「更生施設における教育リハビリテーションの取り組み」『フォーラム'99』1999.4 p.54-57
- 中城 正亮 [2005] 『公文会長と土佐—公文式の源流を訪ねて』公文公教育研究所 (非売品) 32p
- 橋本 主司ほか [2004] 「後天性脳損傷者に対する教科学習訓練の試み」『認知神経科学』Vol.6 No.1 p.20-27
- 長谷 総明 [2006] 「読者へ届く本づくり」秋田喜代美, 黒木秀子 (編)『本を通して絆をつむぐ』北大路書房 p.154-166.
- 原田 京子, 吉田甫 [1997] 「先取り学習が学校での学習に及ぼす影響について」『宮崎大学教育学部教育実践センター紀要』No.4, P.43-58
- 藤永 保, 品川 玲子, 渡辺 千歳, 荻原 美文, 佐々木 丈夫, 堀 敦 [2005] 「ダウン症児の早期療育と母親の養育態度」『発達心理学研究』日本発達心理学会 2005-04-20 16 1 p.81-91
- フックス 真理子 [2004] 『ニッポンの公文ドイツの教育に出会う』筑摩書房 230p
- 保坂 展人 [1994] 『危ない公文式早期教育』太郎次郎社 204p
- 松田 工, 新倉 秀樹, 秋山 一夫 [1984] 「導入法の具体例と習熟について: 公文式学習法における分数の約分を中心として」『日本数学教育学会誌』臨時増刊, 総会特集号 日本数学教育学会 1984-08-01 66 p.114
- 宮原 和子, 藤永 保, 望月 洋佑, 永山 京子, 小林 勇彦 [2000] 「多人数・個人別・能力別教育による42年にわたる発達の実践研究: 公文式教育とJ.M.HuntのMatchingの検討」日本教育心理学会『日本教育心理学会総会発表論文集』2000-07-25 p.42
- 村上 和雄 [2010] 『こころと遺伝子』実業之日本社 p.89-94
- 山下 亮 [2008] 「公文式日本語教室の学習を通して自分の可能性にチャレンジする人たち (特集 日本で暮らす外国人—地方都市の日系人・アジア人)」『アジア遊学』(117) [2008.12] p.96-99
- 山田 一郎/公文公 [1984] 『南風対談』高知新聞社 p.45-62
- 山本 明 [1984] 「公文式教育その奇跡的躍進の秘密—巨大教育産業を支えるカリスマの重層構造 (サービス化社会の未来<特集>)」『エコノミスト』62 (22) [1984.06.04] p.54-59
- 吉田 甫 [2003] 『学力低下をどう克服するか—子どもの目線から考える』新曜社 p.215-242
- 和田 秀樹 [2009] 『子供を伸ばす教育現場』PHP研究所 p.47-62

(2010年11月17日受理)

2010年度版 くもんのすいせ!

●新しくすいせん図書に入った本 □の印は、教材に採用されている作品です。

5A			4A			3A		
1	うたのこころ	くもんのすいせん図書	1	ねずみくんのすいせん図書	ボクは	1	ほらどきどきおかし	くもんのすいせん図書
2	どうぶつのおやこ	くもんのすいせん図書	2	ふたたみさきつねねこ	こくま	2	わたしのワンピース	こくま
3	あひちゃんのぼん (第1集) (3冊)	くもんのすいせん図書	3	いたいはいはんとていけ	くもんのすいせん図書	3	ほけたよほけたよ	くもんのすいせん図書
4	いなりいなりいなり	くもんのすいせん図書	4	かばくん	くもんのすいせん図書	4	おぼけのパーリビバ	くもんのすいせん図書
5	くだもの	くもんのすいせん図書	5	ずどもがはじめてでる絵本 第1集 (4冊)	くもんのすいせん図書	5	しゃっしんこうろ	くもんのすいせん図書
6	あひめさきめ	くもんのすいせん図書	6	あかいふうせん	くもんのすいせん図書	6	バスででかけ	くもんのすいせん図書
7	じどうしゃ	くもんのすいせん図書	7	かき	くもんのすいせん図書	7	どうぶつはやくちあいうえお	くもんのすいせん図書
8	じのないえほん	くもんのすいせん図書	8	はるにれ	くもんのすいせん図書	8	ちいさなまねねこ	くもんのすいせん図書
9	じゃあじゃあひらひら	くもんのすいせん図書	9	あいうえおの本	くもんのすいせん図書	9	にんじんさんかきいけ	くもんのすいせん図書
10	パチパチ	くもんのすいせん図書	10	あまのこ	くもんのすいせん図書	10	あまのこさんかきいけ	くもんのすいせん図書
11	かきえあふ	くもんのすいせん図書	11	いんじき	くもんのすいせん図書	11	シマウマだけどうき	くもんのすいせん図書
12	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	12	わたしはあまのこ	くもんのすいせん図書	12	きつねとねずみ	くもんのすいせん図書
13	なにいろ?	くもんのすいせん図書	13	でんしゃ	くもんのすいせん図書	13	こいぬがまわるふ	くもんのすいせん図書
14	のびのびのーん	くもんのすいせん図書	14	とりかえ	くもんのすいせん図書	14	わたし	くもんのすいせん図書
15	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	15	ローリーローリー	くもんのすいせん図書	15	ぼくとおとうさん	くもんのすいせん図書
16	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	16	どんどこももんちゃん	くもんのすいせん図書	16	ぼくとおとうさん	くもんのすいせん図書
17	ねこがいてい	くもんのすいせん図書	17	ねこがいてい	くもんのすいせん図書	17	ねこがいてい	くもんのすいせん図書
18	やさい	くもんのすいせん図書	18	ねこがいてい	くもんのすいせん図書	18	ねこがいてい	くもんのすいせん図書
19	どうぶつのおやこ	くもんのすいせん図書	19	1, 2, 3 どうぶつえん	くもんのすいせん図書	19	あいうえおひらけ	くもんのすいせん図書
20	どうぶつのおやこ	くもんのすいせん図書	20	ねこがいてい	くもんのすいせん図書	20	ねこがいてい	くもんのすいせん図書
21	どうぶつのおやこ	くもんのすいせん図書	21	タンタンのぼうし	くもんのすいせん図書	21	ディック	くもんのすいせん図書
22	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	22	でんしゃでんしゃ	くもんのすいせん図書	22	14ひきのあまのこ	くもんのすいせん図書
23	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	23	いたすこね	くもんのすいせん図書	23	14ひきのあまのこ	くもんのすいせん図書
24	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	24	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	24	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
25	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	25	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	25	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
26	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	26	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	26	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
27	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	27	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	27	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
28	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	28	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	28	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
29	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	29	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	29	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
30	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	30	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	30	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
31	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	31	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	31	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
32	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	32	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	32	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
33	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	33	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	33	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
34	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	34	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	34	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
35	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	35	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	35	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
36	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	36	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	36	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
37	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	37	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	37	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
38	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	38	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	38	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
39	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	39	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	39	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
40	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	40	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	40	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
41	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	41	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	41	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
42	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	42	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	42	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
43	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	43	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	43	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
44	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	44	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	44	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
45	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	45	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	45	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
46	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	46	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	46	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
47	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	47	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	47	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
48	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	48	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	48	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
49	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	49	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	49	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
50	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	50	あひさあひさ	くもんのすいせん図書	50	あひさあひさ	くもんのすいせん図書
くもんの読書コース 5A			くもんの読書コース 4A			くもんの読書コース 3A		

■くもんのすいせん図書は、読み聞かされて子どもたちに人気が高い本や、古今東西の名著を中心に、図書を読みやすいものから12段階に分け、各段階ごとに30冊

2010年度版 くもんのすいせん図

●新しくすいせん図に入った本 □の本は、教材に採用されている作品です。

C			D			E			F		
1	おしゃべりなごきやき	新井和子 著 角川書店 1978	1	さんごつね	手塚治虫 著 角川書店 1978	1	漢文の多い料理店	宮川賢二 著 角川書店 1978	1	シートン動物記(1) 動物の生涯	シートン 著 角川書店 1978
2	少年と子犬め	宮川賢二 著 角川書店 1978	2	夢のいそはるのいる 白ひょうし	宮川賢二 著 角川書店 1978	2	キャプテンはつらい男	宮川賢二 著 角川書店 1978	2	あしなひおじさん	宮川賢二 著 角川書店 1978
3	ちいさいももちゃん	宮川賢二 著 角川書店 1978	3	先生のおうしん	宮川賢二 著 角川書店 1978	3	マヤの一家	宮川賢二 著 角川書店 1978	3	胸の教室	宮川賢二 著 角川書店 1978
4	大きい1年生とちいさい1年生	宮川賢二 著 角川書店 1978	4	こちらマギー探偵団	宮川賢二 著 角川書店 1978	4	星と空	宮川賢二 著 角川書店 1978	4	大草原のふしな	宮川賢二 著 角川書店 1978
5	エルマーのぼうけん	宮川賢二 著 角川書店 1978	5	それいざスゴク三人組	宮川賢二 著 角川書店 1978	5	ふさふさのさくら	宮川賢二 著 角川書店 1978	5	ビルマの冒険	宮川賢二 著 角川書店 1978
6	なぞなぞのすきな女の子	宮川賢二 著 角川書店 1978	6	かくやけめ	宮川賢二 著 角川書店 1978	6	空気がなくなる日	宮川賢二 著 角川書店 1978	6	花嫁と花婿	宮川賢二 著 角川書店 1978
7	もしかしららば	宮川賢二 著 角川書店 1978	7	じごくのすけべ	宮川賢二 著 角川書店 1978	7	うさぎのめをさる	宮川賢二 著 角川書店 1978	7	ぼくのお母さん	宮川賢二 著 角川書店 1978
8	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	8	あひだ	宮川賢二 著 角川書店 1978	8	鬼が出た	宮川賢二 著 角川書店 1978	8	ともだち海海のにおい	宮川賢二 著 角川書店 1978
9	サーカスのライオン	宮川賢二 著 角川書店 1978	9	グリン・グリン	宮川賢二 著 角川書店 1978	9	きまぐれロボット	宮川賢二 著 角川書店 1978	9	魔法の老婦人	宮川賢二 著 角川書店 1978
10	まふまふのきょうだい	宮川賢二 著 角川書店 1978	10	お金のあまき	宮川賢二 著 角川書店 1978	10	ひらひらひらり	宮川賢二 著 角川書店 1978	10	魔法の王子さま	宮川賢二 著 角川書店 1978
11	やまのぼし	宮川賢二 著 角川書店 1978	11	オイン・オイン	宮川賢二 著 角川書店 1978	11	さよならエルマおばあさん	宮川賢二 著 角川書店 1978	11	本をさがす	宮川賢二 著 角川書店 1978
12	ロケットのひこうき	宮川賢二 著 角川書店 1978	12	緑のわんぱく	宮川賢二 著 角川書店 1978	12	おやすみトリス	宮川賢二 著 角川書店 1978	12	マザー・テレサ	宮川賢二 著 角川書店 1978
13	そくそくそく	宮川賢二 著 角川書店 1978	13	野良猫のせう	宮川賢二 著 角川書店 1978	13	マッドマックス	宮川賢二 著 角川書店 1978	13	クマのプーさん	宮川賢二 著 角川書店 1978
14	トレスのパン	宮川賢二 著 角川書店 1978	14	ぼくのおひな	宮川賢二 著 角川書店 1978	14	おれがわいておれがわいて	宮川賢二 著 角川書店 1978	14	オズの魔法使	宮川賢二 著 角川書店 1978
15	花の山	宮川賢二 著 角川書店 1978	15	大どろろ	宮川賢二 著 角川書店 1978	15	動物の国	宮川賢二 著 角川書店 1978	15	バスワードは、ロー・ム・フ	宮川賢二 著 角川書店 1978
16	つるにようばう	宮川賢二 著 角川書店 1978	16	夢をみる	宮川賢二 著 角川書店 1978	16	大盗いんげん	宮川賢二 著 角川書店 1978	16	ふたつの夢のちえ	宮川賢二 著 角川書店 1978
17	てふくろのせい	宮川賢二 著 角川書店 1978	17	たのしい一週間	宮川賢二 著 角川書店 1978	17	だれも知らないいさな	宮川賢二 著 角川書店 1978	17	ジャングル・ブック(2巻)	宮川賢二 著 角川書店 1978
18	つりばし	宮川賢二 著 角川書店 1978	18	高くつたのび	宮川賢二 著 角川書店 1978	18	あしひきのアリス	宮川賢二 著 角川書店 1978	18	おじいさんの太郎	宮川賢二 著 角川書店 1978
19	ちいさいのちいさい	宮川賢二 著 角川書店 1978	19	ペーパー・プー	宮川賢二 著 角川書店 1978	19	シャロー・ワット	宮川賢二 著 角川書店 1978	19	チョコレート工場	宮川賢二 著 角川書店 1978
20	おにのぼし	宮川賢二 著 角川書店 1978	20	おにのぼし	宮川賢二 著 角川書店 1978	20	地下の小人たち	宮川賢二 著 角川書店 1978	20	少年探偵団	宮川賢二 著 角川書店 1978
21	ひろし	宮川賢二 著 角川書店 1978	21	ひとし	宮川賢二 著 角川書店 1978	21	あしひきのアリス	宮川賢二 著 角川書店 1978	21	動物の国	宮川賢二 著 角川書店 1978
22	ぼくは王さま	宮川賢二 著 角川書店 1978	22	女の子のこころ	宮川賢二 著 角川書店 1978	22	動物の国	宮川賢二 著 角川書店 1978	22	動物の国	宮川賢二 著 角川書店 1978
23	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	23	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	23	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	23	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
24	エノケンの目	宮川賢二 著 角川書店 1978	24	エノケンの目	宮川賢二 著 角川書店 1978	24	エノケンの目	宮川賢二 著 角川書店 1978	24	エノケンの目	宮川賢二 著 角川書店 1978
25	きょうの目	宮川賢二 著 角川書店 1978	25	きょうの目	宮川賢二 著 角川書店 1978	25	きょうの目	宮川賢二 著 角川書店 1978	25	きょうの目	宮川賢二 著 角川書店 1978
26	いっしょ	宮川賢二 著 角川書店 1978	26	いっしょ	宮川賢二 著 角川書店 1978	26	いっしょ	宮川賢二 著 角川書店 1978	26	いっしょ	宮川賢二 著 角川書店 1978
27	つるにようばう	宮川賢二 著 角川書店 1978	27	つるにようばう	宮川賢二 著 角川書店 1978	27	つるにようばう	宮川賢二 著 角川書店 1978	27	つるにようばう	宮川賢二 著 角川書店 1978
28	世界のわんぱく	宮川賢二 著 角川書店 1978	28	世界のわんぱく	宮川賢二 著 角川書店 1978	28	世界のわんぱく	宮川賢二 著 角川書店 1978	28	世界のわんぱく	宮川賢二 著 角川書店 1978
29	日本のわんぱく	宮川賢二 著 角川書店 1978	29	日本のわんぱく	宮川賢二 著 角川書店 1978	29	日本のわんぱく	宮川賢二 著 角川書店 1978	29	日本のわんぱく	宮川賢二 著 角川書店 1978
30	大盗いんげん	宮川賢二 著 角川書店 1978	30	大盗いんげん	宮川賢二 著 角川書店 1978	30	大盗いんげん	宮川賢二 著 角川書店 1978	30	大盗いんげん	宮川賢二 著 角川書店 1978
31	モグラ	宮川賢二 著 角川書店 1978	31	モグラ	宮川賢二 著 角川書店 1978	31	モグラ	宮川賢二 著 角川書店 1978	31	モグラ	宮川賢二 著 角川書店 1978
32	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	32	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	32	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	32	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
33	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	33	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	33	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	33	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
34	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	34	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	34	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	34	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
35	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	35	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	35	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	35	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
36	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	36	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	36	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	36	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
37	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	37	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	37	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	37	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
38	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	38	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	38	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	38	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
39	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	39	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	39	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	39	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
40	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	40	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	40	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	40	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
41	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	41	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	41	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	41	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
42	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	42	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	42	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	42	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
43	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	43	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	43	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	43	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
44	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	44	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	44	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	44	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
45	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	45	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	45	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	45	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
46	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	46	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	46	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	46	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
47	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	47	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	47	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	47	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
48	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	48	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	48	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	48	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
49	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	49	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	49	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	49	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978
50	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	50	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	50	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978	50	おかしな目	宮川賢二 著 角川書店 1978

●新しくすいせん図に入った本 □の本は、教材に採用されている作品です。

書一覽表(2)

2010年4月現在 (注) 価格は、消費税込みの定価です。価格は、変更されることがあります。KUMON

G				H				I			
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13
14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14
15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15
16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16
17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17
18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18
19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21
22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22
23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23
24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27
28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28
29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29
30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30
31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31
32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32
33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33
34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34
35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35
36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36
37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37
38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38
39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39
40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41
42	42	42	42	42	42	42	42	42	42	42	42
43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43
44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44
45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45
46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46
47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47
48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48
49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49
50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50

銀行三井物産教育研究會

©2010 Pearson Education, Inc. 教育·科技·文化·出版 2010-2009000000

Breakthroughs in Education:
Toru Kumon's creation of the "Kumon Method"
and Its Global Expansion
Rediscovery of Reading and Pursuit of a "Just Right" Point

Katsuo OKITA

It is well known that the Kumon Method of education, which has attracted keen attention worldwide, has experienced two breakthroughs and has undergone continuous innovation. The first breakthrough produced the Kumon Method as a result of Toru Kumon's home training of his son, while the second breakthrough led to global expansion of the Kumon Method. The materials presented in this paper cover all of the discourses of the founder, Toku Kumon, for the period between 1954 and 1995. In addition to these materials, I have used the results of objective research conducted in four different fields (total quality control, history of modern education, cognitive psychology, business administration). Strategic innovation in the Kumon Method was ignited by the rediscovery of reading and was driven by the engine of a "just right" point.